

二人の武蔵

五味康祐

第三卷



二人の武蔵

第三卷

五味康祐



新潮社版

二人の武藏

第三卷

昭和三十二年九月二十六日 印刷
昭和三十二年九月三十日 發行

定價貳百七拾圓

地方 賣價 貳百八拾圓

著 者 五 味 康 祐

東京都新宿區矢來町七十一
發行者 佐 藤 亮 一

東京都千代田區神田神保町三ノ二三
印刷者 塚 田 重

印刷所 塚田印刷株式會社
東京都新宿區矢來町七十一

發行所 株式會社 新 潮 社

電話東京三四局代表七一一(九)
振替東京 八〇八番

製 本 神田 加藤製本所

第三卷
目次

禿 (かぶろ)

..... 七

江戸

..... 三

皮袴組

..... 五三

鮮人使者

..... 九

仲裁

..... 一〇

葉櫻

..... 一三

奥州へ

..... 一四三

別れ道

..... 一六

遺 兒……………一八七

再び江戸へ……………三二

師 弟……………三九

訣 別……………二四七

嚴 流 島……………二七〇

水焦上、火酒雲……………二八七

宿 命……………三〇四

武 藏 の 死……………三二七

挿 装
繪 幀

木
下
二
介

二人の武藏

第三卷

禿かぶろ

そのころ壽々の方は、しょんぼり部屋で項垂うなだれていた。

「おつれさまはどうなさいましたかえ？」

膳ぜんを運んで來て女中が訊いたが、弱々しく笑って、

「……あちらは？」

別室いふしやうの武藏むさうと千珠ちしゆの様子を尋ねる。

「お食事でございますかえ、いま召上っていますわいなあ」
權之助が戻って來たのは汗もすっかり冷さめてからだ。

「何じゃ、待っておって下されたか。濟まん事であつた」

早速並んで膳につき、

「兩人の様子は、どうじゃ」

壽々と同じことを尋ねた。

「係りが違いますでなあ……今階下したで、傍輩ほうはいがお膳をさげに行きましたら、お二人とても御圓滿

で、愉しそくに笑うていなされたそうなえ」
「フム、圓滿……さもあるうで」

「壽々と夢想が同じことを氣にしたから、女中は氣をきかせたつもりだろう、晩食を終ってしばらくしてから、そつと障子をあげ、

「あちらのお二人さま、灯を消して今お寝りなされたそうええ。……とても、お武家さまはお優しゅうなされていますそうじゃ」

にっとなつて報告した。

「壽々は顔をそむけ、上唇を嚙んだが權之助は上機嫌で、

「傍輩が云うておったか？」

「はい、あの様なみごと、いとお方となら無理もないと。ホホ……」

「みごと、いとは、何じゃい？」

併し女中は含み笑いをしただけで、

「……おふさりなさりませ」

意味ありそうに、障子を閉めた。

翌日は金谷に一泊。

夢想はもう、武藏と千珠にはわざと顔をあわさぬようにして、

「さ、急いで参らんかい」

壽々と岸柳を促し、どんどん先きへ行く。あとの二人を存分に語らせてやろう心づもりである。壽々に對しては武藏と二人分のサービスをした。

それでも内に鬱勃たる血は制し得ぬか、府中に泊る晩、とうとう壽々に、
「今晚ばかりは、こらえてくれい」

あやまつて彌勒町の曲輪へ出掛けた。

當時、遊女屋の結構は戦前の吉原と左程異らず、先ず郭の表門（俗に大門）をはいると大道あり、これを仲の町という。

遊女は揚屋に呼ぶ。

遊女屋は樓造りで、前が格子、脇に入口があり、其の内に沓拔があり、傍に高い一小席がある。その上に暖簾が懸る。皆木綿である。紺の地に白く家號や紋を染めてある。

遊女がこの席に出るときには三絃を鳴らして合圖し、これをすが搔きと稱して、此の音のおわらぬうちに座に著くのが定めである。さて夢想權之助は、例の羽織で、悠然と胸をそらして仲の町を歩いて行つた――

あがつたのは仲之町の某家で、紫君という新造が相手である。

「で、こば、ちねえお武家さまや、お待ちやれ。ひら、をきつた奴がおりますで、どうしに行かずやあ、……」

呼びかけた火車の老嫗の笑顔がふと氣にいったので、

「何のこと申しておるか」

寄って行って、そのまゝあがつた。

火車とは、遊女が外出する折には介添えし、すべて樓上のことを司つて遊女の進退をしきりする世話役のことである。いわゆる遣手婆である。

ついでに云うと、お齒黒をそめた遊女を年増といい（人妻とは異つて眉毛は剃っていない）、齒を染めない遊女を新造という。

かぶろ（禿）は、遊女に仕える童女で、後にはかむろと訛った。——以下、當時のおかしい里言葉を次に書いてみる。

座敷持 居所二の間のある遊女である。

部屋持 居所ひと間の遊女をいう。

正面 見世に出るとき正面に坐るのでこの名がある。座敷持の遊女のこと。

壁 見世の壁下に坐る。是部屋持の遊女。

裏 再度その宮と遇うのをいう。初めての客なら初會である。

割床 一閨に二客臥せるをいった。屏風を以て其の間を隔てた。

持 現今モテるの意と變らない。

髪切 薄情の客をこらしめる仕業とされ、桶臥ともいったそうだ。

突出 遊女となつて始めて見世に出るのをいう。

出居仕 十年の勤限が終つて後、他の土地で勤めに出るのを稱した。

その他、三度目の客は、黄金を遊女に贈つて懇ろの意をあらわしこれを床花というが、この床花をつけてはじめて馴染の客と呼ばれる。さて夢想權之助は紫君なる新造を揚げたが、小柄で、まだ目の涼しい十七八の妓であつた。駿府（静岡）は家康の居城で、田舎武士の密かに遊里に通うのも多いから、年の割には武士扱いにも馴れている。念のために云つておくと、後年の江戸吉原は駿府のこの遊女町が移されたものである。

酔いをおびて夢想は機嫌よく、眼が異様にキラキラ耀^かやき出した。

「お主も一杯いかぬか」

大刀を傍らに引寄せて、太鼓持や藝者（男女ともにこの業あり）の誰彼の見境いなく盃をすゝめる。しまいには禿にまで、

「のまぬかい」

と盃をとらせた。

「お武家さまは、そのような羽織を召して、……えずいわえ。なあ」

「そうじゃそうじゃ」

「えずい？ 何のことかい。方言はやめてくれ。」

「お武家さまは、江戸でおじゃりますのかえ」

「左様」

「兵法をおつかいなされますか」

「左様じゃ」

「なら、於職さんのお客と同じじゃなあ」

「そうじゃそうじゃ」

「何、別に兵法者もあがっておると？」

「あい」

「何流の武藝者と名乗っておるか」

「そんなこと知りませぬわいな。……お坊さまじゃもの」

「坊主？」

「あい」

「坊主の兵法遣いか？」

「あい」

夢想の盃が口邊で、とまった。

「どのようなお坊じゃな？」

「もう三日も居續けなされていますわえ。にいしい（新しい）てっぺん袋（頭巾）をおかぶりなされて、ごせっぱい（小ざっぱりしている）お坊さまじゃ。——なあ？」

「そうじゃそうじゃ、お武家さまよりごせっぱいわいな。オホホ……」

「それに、びつきようも、どっとおもっておくれじゃえ。オホホ……」

女たちは紅唇をすぼめて笑った。「びつきよう」とは錢のこと、おもるは「おごる」である。

「そうかい」

ニヤニヤして夢想は手の盃をほした。小ざっぱりして、金ばなれのいゝ兵法者ならタカが知れている、と見たのである。

「ではその和尚とやらのところで、せいぜい奢（せ）ってもらえ。拙者は、いやじゃぞ」
それから又ひとしきり、にぎやかに騒いだ。

「みてくれなされ……」

「どうぞ、おふさりなさりませ」

火車や藝者が花やいだ挨拶を残して姿を消すと、

「どうじゃ、のまぬか……」

あらためて遊女の紫君と差向いで、盃を交わす。

禿だけはまだ残っていて、何かと紫君の吩咐つける用を足した。

「よい子じゃのう、そもじ、幾つかい？」

「八ツじゃぞえ」

「ふーむ。大きゅうなったら、美しゅうなろう」

目もとのあたりがフト壽々に似ている。

「もうお前は、お退り」

紫君がいうと、

「あい」

小さな手をついて挨拶をして、素直に座敷を出ていった。

「おしろさまのような子でありますようえ？」

「おしろさまとは何じゃ？」

「お蠶のことでおざんす」

「ふーん、蠶のような子か。うまいこと云いよる」

ふたりが同衾したのは表通りを往反する遊客のそと歩きも遠ざかる頃にちかい。

しばらくすると、そのひっそりした表通りにバタバタ蹀音がして、何やら聲高に喚き合い、確

かに夢想のあがっている樓ののれんをくぐった。

それからほんの少時。

「何處じゃ、巨雲坊どの何處におられる？」

口々に云って、仲居の案内で足音荒く廊下を通りすぎて行く。

やがてサッと障子の開く音が奥の座敷でした。

「おゝ、此處におられましたか。——我らの尋ねる相手見つかかり申したぞ。佐々木小次郎でござったわ」

「何、小次郎？」

太い聲が奥で尋ねた。

「左様。和尚も御存知のように荒井の宿で葬られたこと知り申したで、埋葬の手傳い致した土地の百姓どもを漸くにてさがし當て、様子を聞けば、何やら従者をしたがえた年寄りの武士と申す。よって當地まで足跡を追うて参ったが、先刻、府中の宿にて確かにそれらしい老人の投宿致すを突きとめ申した。何でも件の老人くんだんのほかにも若い武士一兩人が同行致しおる由——」

別の聲が、

「それに女も連れておるそうでござる」

と云い添える。

ちよつと不氣味な沈黙。